

日本文学と戦争

新船海三郎『戦争は殺すことから始まった—日本文学と加害の諸相』を読む

Japanese literature and War:

Reading Kaisaburo Shinfune's "War Begins with Murder:

Japanese Literature and Various Aspects of Violence"

穴見 慎一

ANAMI, Shinichi

はじめに

昨年11月に開催された「〈戦争と平和の問題を総合人間学的に考える〉研究会（第七回会合）」で、新船海三郎『戦争は殺すことから始まった—日本文学と加害の諸相』（2016年、本の泉社）に出会い、強い衝撃を受けた。それは日本の戦争文学批判を展開した書（2016年、本の泉社）であり、会合では新船氏をお招きし、そのエッセンスの多くを著者本人に語っていただいた。この得難い好機をできる限り生かし、本稿では、会員、読者諸氏に本書の魅力を少しでもお伝えすることができればと思う。

そこで、まずは著者（新船氏）自身が語った「執筆の契機」を紹介し（第1節）、「構成および概要」を示したうえで（第2節）、改めて著者が「何を考えたのか」について述べ（第3節）、これを通じて「日本文学と戦争」について考えることとしたい。

1 新船氏自身による執筆の契機

新船氏は大きく四つの執筆の契機（①特定秘密保護法に反対する文学者の集会、②3.11以後の日本、③戦争法反対の闘い、④辺見庸『1★9★3★7』の

出版）を挙げられたが、それらに通底する問題意識の核には日本の戦争文学におけるある大きな偏りに対する違和感がある。それは、日本文学には、日本軍の加害（侵略、植民地化、虐殺、強姦、掠奪）について書かれたものが圧倒的に少ない、ということである。例えば、ヒロシマやナガサキ、東京大空襲についてはあまたの著作が今も尚出版されながら、「南京大虐殺」についての小説は、強いて挙げられるものを含めても、3、4作というのは、まともな文学の姿とはいえない、ということである。その傾向は、2012年から刊行された集英社の「戦争と文学」シリーズにも如実に表れており、その大半は戦争犠牲、被害について書かれたものとなっていることが指摘されている。

確かに、先の戦争の加害の側面にはまともに向き合おうとはせず、被害の側面ばかりが強調されるような日本・日本人の姿勢は、いたるところに散見される。その一つが、特定秘密保護法に反対する文学者の集会で新船氏が感じた違和感なのであろう。それは、法案反対の理由が被害者の側に立つものでしかなかったからであった。すなわち、戦時中、文学者は自由に書くことが許されず、弾圧された、だか

ら反対、とするものである。しかし、実際は、戦時中に自由に書けなかった人はごく限られていた、と新船氏は指摘する。すなわち、その他の人々は書いたわけであり、何でもないものを書いたばかりではなく、むしろ戦争へと国民感情を煽るようなものを書いたのだ。つまり、そこにはペンが容易に加害者になることを捨象して、犠牲だけをいうことの不当性が気付かれていないのだ。

「3.11」の経験とその後の震災復興の経緯への違和感もまたそこに繋がる。「フクシマ」以後、「日本は変わらなければならない」という、日本社会の在り方をその根底から問う声が高潮した。すなわち、戦後の歩み、エネルギー政策、経済の成長と効率第一主義で果たして良かったのか、と。しかし、そう問いながらも、何故、なし崩し的に原発の再稼働が推し進められ、恰も事故そのものが無かったことにされようとするのか。何故、誰も責任をとろうとはしないのか。つまり、そうした事態を前に、戦争責任、加害責任を問わないまま戦後 70 年の歳月を生きてきたことに大きな問題があるのではないか、という強い疑念が生じるのだ。

また、その一方では、一昨年の「安保法制法案」（戦争法案）反対運動を描いた小説の中で戦後生まれの世代が安倍内閣を批判する場面で用いられた言説（「新しい戦前」「日中戦争前夜」）への違和感も指摘された。それは、体験していないことを何のためらいもなく恰も当事者のように語ることで、戦争がフィクション化されてしまうことに対する懸念である。しかし、当事者が死に絶えても、戦争体験は受け継いで行かれねばならない。ならば、どうするのか。それは、決して当事者には成れない戦後生まれが、当事者意識を持ち続けることでしか解決され

得ない、と新船氏は指摘する。そのためには、フィクションである小説世界から真実を読み取り、聞き取り、自分のものにするほかないのであって、それ故、日本の戦争文学の姿勢が問われるのである。

そうした状況にあって、近刊の辺見庸『1★9★3★7（イクミナ）』（金曜日、2015 年）は、一際異彩を放つ著作であった。それは、日本軍の中国戦線での蛮行を問わないできたことの意味を問う作品であったからだ。そこで辺見は、堀田善衛の『時間』を読み解きつつ、中国に派遣されていた父親から何の話も聞いてこなかったことを省み、その足跡を辿ろうとする。おそらく、そうした試み（努力）こそが、先の戦争の当事者でない者が当事者意識を持つことができる唯一の手段ではないのか。そして、二度と「侵略戦争をさせない」という強い想いが新船氏をして『戦争は殺すことから始まった—日本文学と加害の諸相』を成立させたのである。

2 構成および概要

本書（総頁数 271）は「序—戦争体験は語れないが」に始まり、それに続く四つの章と巻末の「付—一九三〇年代の抵抗線—武田麟太郎と『人民文庫』の場合」から成るが、「序」については第 1 節で述べた「執筆の契機」と内容的に多分に重なるので割愛し、ここではそれ以後の内容について概説する。

まず、「一、それを見た作家たち」では、日中全面戦争に突入した 1937 年以降、戦場を目の当たりにした作家たちがそれをどのように書いたのか、あるいは書かなかったか、が論じられる。いち早く書いたのは石川達三（『生きている兵隊』）である。この小説はのちに発禁処分となり、禍筆事件として石川は執行猶予付きの禁固刑となるが、法廷に立った

石川は、戦争の真実を知らせ、国民に非常時を認識させることの必要を主張したとされる。そこには確かに石川の憂国の想いがあった。しかしそれは、権力側だけでなく、文学界にも受け入れられなかった。例えば、戦争・戦場の悲惨を「死にたくなければ殺すしかない、生への動物的本能」に還元しようとした石川に対して、「文学は果たしてそれでよいのか」とする宮本百合子の評言は厳しい。ただ、その指摘は多分にあたっていると新船氏も認めているが、足りないところはいろいろあろうとも、この小説が戦争は兵士が人間であることを壊し、殺し・奪い・犯すことに躊躇しなくなる狂騒の場以外ではないことを確かに伝えている、とも評価する。そして、そのことを批判の言葉で軽くしてはならない、と強調する。これに対し、「見ても書かなかった」作家の一人として林芙美子を取り上げられる。特派員として「女性の南京一番乗り」と言われた林は『黄鶴』を発表するが、人間の為したこととは思われない仕業を見て、人間が書けないと懊悩しながらも、そこを突き破ろうとはしなかった。人間をどこまでも突き止め、それを描こうとしないのでは、もはや作家は死んだと言ってもいい、と新船氏は批判する。また、戦中、戦後を通じ、日本軍の蛮行と向き合おうとした作家として火野葦平が取り上げられる。火野は兵士でありつつ作家でもあったわけであり、その点が先の二人とは決定的に異なる。火野は戦争三部作（『麦と兵隊』『土と兵隊』『花と兵隊』）によって一躍文壇の寵児となるが、戦後、「戦犯作家」として戦争責任を追及され、一時期公職追放の処分を受けていた。しかし、それらの作品を今読み返してみても、そこには兵隊の苦労がありのまかに書かれていて、必ずしも戦争を煽るものの強さは感じられない、

と新船氏は擁護する。戦後の反戦・平和の流れの中で、自らに都合の悪い過去を葬り去ろうと努めた作家が大勢を占めたのに対し、火野は、戦後のバカ正直ともいえる削除ヶ所の復元を行い、その後自らの命を絶った。それは、重い気持ちは持ちつつも目をそらし、見なかったことにして戦場を飛び歩いたことへの火野なりの贖罪であったのかもしれない。作家が何事かを見、それを書く、あるいは書かない、ましてや戦争とくに日本軍の蛮行にどう向き合うかは、ただ事実がそこにあったかなかったかだけを意味するのではないのだ、と新船氏は強調する。

次に、内容的に強い関連を持つと考えられる二つの章（「二、もう「鬼子（クイズ）」とは呼ばない」「三、「かんにんしとくなあれ」と叫ぶ兵」）に言及する。なぜならば、そこでは日本軍の加害の諸相を描いた作品を通じて、「人間とは何か」が最も先鋭な仕方で繰り返し問われているからである。前者では、「南京大虐殺」を描いた堀田善衛の『時間』が取り上げられる。そこで堀田は、主人公の中国人の目を借りて、日本軍の蛮行を描いてみせた。知識人も職人も農民も、郷里にいれば穏やかな人柄の人間が、戦場ではなぜ兵士ではない一般人まで殺戮をほしいままにし、犯すのか。堀田は、家族を惨殺された主人公に日本兵を「鬼子（クイズ）」と呼ぶのを止めると宣言させ、彼らは紛れもない人間だ、とする。それはどういう意味を持つのか。後者では、井上俊夫の『初めて人を殺す 老日本兵の戦争論』が取り上げられる。それは、井上自身の初年兵としての体験を綴ったものだが、二十歳で招集された井上を戦場で待っていたのは、実際の戦闘ではなく、度胸付のためになされた実物の人間を使った銃剣術の刺突訓練だった。命令されるがまま、井上は、二十

代の中国人捕虜を銃剣で突いた。捕虜は炊事場で働かされていた顔見知りの青年だった。戦争中のことであり、井上が罪に問われることはない。しかし、中国人青年を突き刺した事実は残り、その記憶は消えない。まして、刺突を強制された時、同じ初年兵の一人が何度も「かんにんしとくなあれ」と泣き叫び、激しい体罰にも拘らず頑迷に抵抗し続け、ついには上官二人がかりで突く真似をさせられて終わるという場面もあり、この時の体験が井上の心中に苦く重くのしかかるのである。馬場と名乗るその初年兵はやや愚鈍で、文字の読み書きにも不自由で、彼を軽く見る心が井上になかったとは言えない。その彼が、いよいよのとき命令に抗う。身もだえしながら叫ぶ言葉は、彼が慣れ親しんだ関西弁である。それは戦地で押し付けられた軍隊用語ではない。一人の人間として、人間の言葉で拒否する。井上から見れば、馬場は何も知らないお百姓である。だが、どちらがその時、普通でまともな人間であったか、あろうとしたか。ここに堀田と井上の問いかけが呼応する。すなわち、「鬼子（クイズ）」だから日本軍は蛮行を働いたわけではないし、その原因は戦場のもたらす狂気のみを決して還元され得ない、ということだ。「殺さなかった兵もいる」、この事実こそが「人間とは何か」を的確に教えているのだ。

これに続く章「四、「後尾収容班」なる殺害部隊」は、これまでの文脈とは少し異質である。そこでは、日本の戦争文学批判の声は鳴りを潜め、むしろ、種々の作品を通じて、皇軍の蛮行の本質に迫る試みが展開される。それを端的に表現するのが「殺したのは「敵」だけではなかった」という小見出しである。つまり、日本軍は組織的に味方も殺していた、という事実の指摘である。その典型の一つが「後尾

収容班」なる部隊の存在である。この部隊は、戦況が悪化する戦争末期になると組織され、退却の足手まといとなる味方の傷病兵の始末の任に当たった。そのやり方は、戦闘不能に陥った者にはまずは自害を勧め、それに従わない場合は殺害する、という容赦のないものであった。ただ、民間人にでさえ自決を迫った沖縄戦のことを思えば、それが軍隊内で横行していたとしても何ら不思議ではないのかもしれない。しかし、それが極めて異常なことであることはいくら強調しても強調しすぎることはないだろう。

最後に、巻末の「付一一九三〇年代の抵抗線—武田麟太郎と『人民文庫』の場合」についてだが、内容的には先の戦争とまともに向き合おうとはしなかった日本の文学界への批判となっており、その意味では、既に紹介した「一、それを見た作家たち」の文脈に繋がるものと考えられる。すなわち、文壇における石川達三や火野葦平への批判は批判として当然あってよいわけだし、それらは多分に的を射ており大事なのだが、しかし、そうした一面ばかりが強調されると、作品の潜在力が矮小化され（場合によっては作品理解が歪曲され）、そこに見える、あるいはそこから見えるはずの戦争の姿を見えなくしてしまう危険があるのである。（新船氏はそれを「角を矯めて牛を殺すようなこと」と表現する。）武田麟太郎が主宰した『人民文庫』に対する文壇の評価がまさにそれであり、世界の反ファシズムの動きと連帯しようとした彼の試みに対する評価はあまりにも低い、と新船氏は指摘する。その理由について新船氏は次の三つを挙げている。①『人民文庫』に対する評論家平野謙の評価の定説化、②中村光夫に代表される「風俗小説」（武田の文学的立ち位置）批判、③1930年代の「人民戦線」についての戦後の

評価の問題。それらは次元の違う話ではあるが、批判者が自らの立場を擁護する為にその対象を貶めるという恣意性の発揮に基づく側面があったことでは一致しており、そこに日本の現代文学の不幸の一端が垣間見られるのである。確かに、1930年代は小林多喜二の逮捕・拷問死、宮本顕治の逮捕・投獄、日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）と日本プロレタリア文化連盟（コップ）の解体、そして日本共産党中央組織の解体など、文学においてだけでなく、侵略戦争と人民抑圧に抗する我が国の戦闘的左翼戦線そのものが、窒息させられようとした時代であった。「転向」も相次ぎ、文学者たちは一挙に戦時体制へなだれ込んでいった。しかし、30年代の半ば過ぎには、そうした事態を受けて、有意の反ファシズム運動が次々に生まれたのだ。それらはスペイン・フランスの人民戦線にも鼓舞されて声を上げた様々な文化人グループであり、その一つが文芸誌『人民文庫』なのだ。その意味で、この時代は決して「暗い谷間」（荒正人）の一語に尽きるものではなかった。それ故、武田麟太郎と『人民文庫』の営みを振り返ることは、戦争の時代を生きた文学者は決して「暗い谷間」に身をすくませてはいなかったことを検証することでもある。そこには、「文学や文化というものが、巨大に立ち上がる強権、抑圧の壁に向かってどのように有効に闘い、その中からどのように創造世界を豊穡のものにし得るかの大事なヒント」が見いだせるのである。それ故また、武田麟太郎と『人民文庫』に正当な位置を与えることは、30年代の彼らにとってだけでなく、明日の文学にとってかけがえのないことだと、新船氏は強調する。なぜなら、それは、文学を生み出す社会の明日をどう構想し、力を尽くすかという、現代を生き

る人間のありようと不可分だからである。

3 新船氏は何を考えたかったのか

既に多くを述べてきたが、本書で新船氏が問うたのは、戦争・戦場の悲惨を「鬼」や「狂気」の一語に還元してはならない、ということである。大半は殺した。しかし、「殺さなかった兵もいる」。この細部にこそ、真理は宿っているのだ。

戦争は「嵐」のような自然現象ではない、と新船氏は強調する。それは、天災のようにその猛威をやり過ぎすしかないものでもなく、「仕方がない」の一言では決してすませられない、ということだ。

「人間だけがとりかえしのつかない行為をなすうのだ（堀田善衛『時間』）」。

戦争とは異常事態である。ただし、それは異常な日常なのであって、人間が生きるという意味においては紛れもない日常である。だとすれば、日本軍の蛮行は戦争という何か特別な状況が引き起こしたのではなく、あくまで日常の延長線上に生じたと理解されるべきであろう。私たち日本人はそれをおぞましいものとして、見たくない、いわない、書かない、すべてが遠い過去のこと、としてきたのではないかと新船氏は指摘する。これまでのように「引き金をひかなかった心理」ではなく、「敵が死ねば自分が殺したように思い、戦友が死ねば自分のせいのように思う」（デーヴ・グロスマン『戦争における「人殺し」の心理学』）兵士の心の奥をどう描くか。

戦争を決して過去のものにしない。それこそが日本の戦争文学に突き付けられた課題であり、それに応えてこそ「文学」ではないのか。先の戦争の加害の諸相に目を向けない限り、私たち日本人の時間があの頃のまま止まっていることにさえ気づくこと

はなく、戦後生まれが当事者意識を持つ者として、戦争体験を引き継ぐことはないだろう。

おわりに

繰り返すが、日本文学には、先の戦争における日本軍の加害（侵略、植民地化、虐殺、強姦、掠奪）について書かれたものが圧倒的に少ない。それを拾って一つにまとめ、文学批判と戦後日本・日本人批判の視角から考察を加えた点に本書の類例のない画期的な意義がある。その意味で、本書は「戦後 70 年」と現代日本を考える重要な手がかりを与えてくれるのみならず、絶えず「人間とは何か」を問いかける点で、総合人間学会員必読の書と筆者は考える。

また、第 1 節で述べたように、本書執筆の主要な契機の一つに辺見庸（2016）が挙げられており、特に二つの章（「二、もう「鬼子（クイズ）」とは呼ばない」「三、「かんにんしとくなあれ」と叫ぶ兵」）との関連が深いので、堀田善衛の『時間』とも合わせて読むことで、「日本文学と戦争」に関する考察を深めていくことができるのではないかと思う。

注

新船海三郎（しんふねかいさぶろう）氏は 1947 年北海道留萌生まれ。日本文芸家協会、日本民主主義文学会会員。

著書に『歴史の道程と文学』『藤沢周平 志高く情厚く』（以上、新日本出版社）、『史観と文学のあいだ』『文学の意志、批評の言葉』（以上、本の泉社）など他多数。

思想・文化誌『季論 21』（季刊）の編集責任者。

参考文献

穴見慎一（2017）「〈戦争と平和の問題を総合人間学的に考える〉研究会第七回会合総括」（※会員向け配信用資料）

新船海三郎（2016）「〈戦争と平和の問題を総合人間学的に考える〉研究会第七回会合への報告」（※ハンドアウト）

辺見庸（2016）『増補版 1★9★3★7』河出書房新社

堀田善衛（2016）『時間』岩波書店

[あなみしんいち／立教大学（非常勤）／環境思想]